

氏名	田中 俊太郎		
ヨミガナ	タナカ シュンタロウ		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第303号		
学位授与年月日	平成30年3月26日		
学位論文等題目	〈論文〉 松平頼則《古今集》研究—近代フランス音楽受容から戦後創作への過程として— 信時 潔《小倉百人一首より》 〈演奏〉 フェリックス・ワインガルトナー《日本の歌》 松平頼則《古今集》他		
論文等審査委員			
主査	東京藝術大学 教授	(音楽学部)	福島 明也
副査	東京藝術大学 教授	(音楽学部)	永井 和子
副査	東京藝術大学 教授	(音楽学部)	塚原 康子
副査	東京藝術大学 教授	(音楽学部)	杉本 和寛

(論文内容の要旨)

本論文においては、松平の創作史の中で、《古今集》で扱われている音楽語法がどのようにして形成されていったのかを明らかにするべく、「松平頼則《古今集》研究—近代フランス音楽受容から戦後創作への過程として—」と題し、松平頼則の創作史及び《古今集》の作品研究を行った。

松平頼則に関する先行研究としては、平本恵子「1930年代における松平頼則のピアノ曲にみられる創作理念と作曲家としての位置」（『芸術研究年報』第17号、広島：広島芸術学会、2004年。）があり、また日本における近代フランス音楽受容に関する先行研究としては、佐野仁美『ドビュッシーに魅せられた日本人—フランス印象派音楽と近代日本』（京都：昭和堂、2010年4月。）がある。これらの論考においては、松平の新古典主義からの影響が指摘されている。しかし、アレクサンドル・タンスマンは、六人組をはじめとするフランス新古典主義に対して批判的な意見を述べており、松平を、唯一新古典主義からの影響を受けた作曲家とすることはできないようである。

第1章は「松平頼則の活動」とし、《古今集》作曲までを中心とする活動を概観した。幼少期の松平は、鳥類画家小林重三から芸術的な創作への刺激を受けると、来日したピアニスト、レオポルド・ゴドフスキーや、アンリ・ジル＝マルシェックス演奏会に刺激され、音楽家への道を決定づけることとなった。小松耕輔に作曲を師事するようになると、小松のクラスで清瀬保二と知り合い、ドビュッシーへの興味を共有した。その後、慶應大学文学部予科でフランス文学を学ぶと、その語学力を活かして、フランス人音楽学者、ポール・ランドルミーの論文「印象主義の衰頹」を翻訳して『音楽新潮』誌上で紹介するほか、2度目の来日を果たしたジル＝マルシェックスからは直接のピアノレッスンを受けた。ポーランド人作曲家アレクサンドル・タンスマンが来日すると、新興作曲家連盟主催の歓迎会で直接対談し、日本音楽との近親性を持つ《8つの日本の歌》などの作品について話を聞く機会を得た。1935年のチェレブニン賞作曲コンクールにおいて管弦楽曲《パストラル》で次席を受賞し、作曲家としての存在感を確かなものとした。1936年から1940年まで毎年国際現代音楽祭に作品を提出し、またケルロイターなど海外在住の演奏家とも知遇を得るようになった。太平洋戦争に突入すると、他の音楽家同様、創作活動に陰りを見せるが、皇紀二千六百年芸能祭では新舞踊の開拓者藤蔭静枝との共作《富士縁起》を発表した。戦後は新作曲派協会で活動し、雅楽を素材としながらタンスマンに影響を受けた作品を発表した。

第2章では、松平の近代フランス音楽受容の実態を、ポール・ランドルミーの翻訳論文及び、戦前の歌曲作品から明らかにした。音楽学者として、六人組の語法や、ジャン・コクトーの言説を批判的に分析したランドルミーであったが、彼の言説はフランス優位のナショナリスティックな思想を背景としていた。松平は《南部民謡集第一集》（1928～1937年）ではドビュッシーやフランス六人組の音楽語法を用いた創作をし、《南部民謡集第二集》において3度堆積による和音を積極的に用いるようになり、コクトーが標榜した六人組の作風からは遠ざかっていくこととなった。松平のそうした作曲の変遷に最も影響を与えたのは、アレクサンドル・タンスマンであった。タンスマンは、音楽において「抒情性」や「主観」が抑圧されることを危惧していた。

第3章においては、そうしたタンスマンからの影響と、雅楽について考察を深め、第4章における《古今集》分析への布石とした。松平は、宮内省が懸賞付きで管弦楽作品を募集した際に配られた長保楽と胡飲酒の楽譜で雅楽と出会い、長保楽を使った《フルートとピアノのためのソナチネ》（1936年）においてはじめて雅楽を素材とした創作を行った。松平は、雅楽への興味のきっかけの一つとして、ハーモニーがあることをあげたが、旋法的な民謡から雅楽への素材の転換と、六人組の作風から3度和音の積極的採用への転換が同時期に行われているのは興味深い。そして、松平は戦後、新作曲派協会において、雅楽の素材にタンスマンの語法を採用しながら、ドビュッシー以降の近代フランス音楽を批判的に捉えて、人間性・音楽性の復活を標榜標榜していくと、《主題と変奏》（1951）によって十二音技法を採用し、戦後の前衛音楽の創作期へと向かっていった。

第4章においては、《古今集》創作において、タンスマン《8つの日本の歌》からどのような影響を受け、そして雅楽を用いた独自の創作へと向かっていったのかを概観した。

本研究によって、《古今集》で使われている音楽語法には、初期のドビュッシーからの影響を受けた平行和音、増4度音程、全音音階から、それを発展させた半音階的な変化音、さらに、六人組やタンスマンが用いた複調などがあることが分かった。さらに、松平は、タンスマンの言説や音楽からの影響のもと、こうしたモダンな語法だけに突き進んでいるだけではなく、「西欧的な色彩」をもった3和音構造を用い、「古今集」の詩人の世界を抒情的に物語っていることも分かった。

(総合審査結果の要旨)

(審査会での演奏)

演奏プログラムは、松平頼則《古今集》という研究テーマに沿って構成され、信時潔、山田耕筰、ワインガルトナー、タンスマン、橋本国彦（ピアノ曲）といった松平に関連性のある作品を取り上げ、松平を研究したからこのようなプログラム

になったと思える程魅力的なものとなった。体調的にも心配がなく艶のあるバリトンの音色で作品の持つ世界を見事に歌い上げた。日本歌曲といった大きなくくりの中で、西洋と日本、現代語と古語、和歌や俳句と詩、翻訳といったそれぞれの関連性などが見えた演奏でもあった。さらにそれらを具現するにあたり和歌や俳句を音楽にするときの言葉としての難しさが表現の難しさになったり、今回四つの異なる原語作品を演奏し、原語に対する未熟さを露呈した部分もあり、今後発声を含め、外国語に対する意識、言葉を扱う技術の尚一層の向上が望まれる。

〈論文〉

予備的研究から松平頼則に絞り込み《古今集》で扱われている音楽語法がどの様に形成されたかを明らかにしている。フランス音楽の受容について師表と対立軸という観点から音楽を捉えている点が新しいとの批評があり、また、タンスマンと松平の人的交流があったところまで論じた文章はあるが、音楽的な中身にまで踏み込んで論じたものはなく、独自性のある論文に仕上がったのだが、推敲が不足していたり様々な誤字、脱字が文章を曇らせているとの指摘を受けた。しかしながら、論文と演奏が有機的に繋がっており、博士後期課程学位審査として十分な成果を上げているという結論になった。